

Fisher 情報計量の測地線と一般化平均

伊藤 光弘 (筑波大学 数理物質系)*¹

佐藤 弘康 (日本工業大学 工学部)*²

1. $(M, d\theta)$ を, 正規化体積測度 $d\theta$ をもつコンパクト連結 C^∞ 級多様体とする. M 上の確率測度空間 $\mathcal{P}^+(M)$ を, $d\theta$ に絶対連続な確率測度 μ で M 上正值連続な密度関数 $f = f(x)$, $x \in M$ をもつものからなるとする. $\mathcal{P}^+(M)$ の位相は, 埋め込み $\rho: \mathcal{P}^+(M) \rightarrow L^2(M, d\theta); \mu = f(x) d\theta \mapsto 2\sqrt{f(x)}$ による誘導位相とする.

$\mathcal{P}^+(M)$ の各接空間 $T_\mu \mathcal{P}^+(M)$ は, $\int d\tau = 0$ を満たす M 上の符号付き測度の全体と見なすことができ, ここには Fisher 計量 G が定義される. Friedrich [2] は計量 G の Levi-Civita 接続 ∇ を求め, 初期条件 $\gamma(0) = \mu$, $\dot{\gamma}(0) = \tau$ を満たす測地線 $\gamma(t)$ が

$$\gamma(t) = \left(\cos \frac{t}{2} + \frac{d\tau}{d\mu} \sin \frac{t}{2} \right)^2 \mu \quad (1)$$

と表せることを示した ([4] も参照). ここに, $\frac{d\tau}{d\mu}$ は Radon-Nikodym 微分である. 本講演では, **確率測度の一般化平均 (冪平均)** の概念による Fisher 計量の測地線の特徴付けについて述べる. また, $(\mathcal{P}^+(M), G)$ に自然に定義される双対接続構造 $(\nabla^{(\alpha)}, \nabla^{(-\alpha)})$ に関する測地線 (α -測地線) についても言及する.

2 定義. $\alpha \in \mathbb{R}$ とする. 写像 $\varphi^{(\alpha)}: \mathcal{P}^+(M) \times \mathcal{P}^+(M) \rightarrow \mathcal{P}^+(M)$ を

$$\varphi^{(\alpha)}(\mu_1, \mu_2) = \frac{1}{C} \left\{ 1 + \left(\frac{d\mu_2}{d\mu_1} \right)^\alpha \right\}^{\frac{1}{\alpha}} \mu_1$$

と定める (ただし, C は確率測度となるための正規化定数). $\varphi^{(\alpha)}(\mu_1, \mu_2)$ を μ_1 と μ_2 の **正規化 α -冪平均** とよぶ. 特に, $\alpha = 1$ のときは算術平均, $\alpha = -1$ のときは調和平均と呼ばれ, $\alpha = 0$ のときは

$$\varphi^{(0)}(\mu_1, \mu_2) = \left(\int_M \sqrt{\frac{d\mu_2}{d\mu_1}} d\mu_1 \right)^{-1} \sqrt{\frac{d\mu_2}{d\mu_1}} \mu_1$$

となり, これを **正規化幾何平均** とよぶ.

3. μ と $\mu' \in \mathcal{P}^+(M)$ が測地線 (1) で結べるとする. つまり, $\gamma(l) = \mu'$ かつ $\gamma(t) \in \mathcal{P}^+(M)$, $t \in [0, l]$ を満たす $l > 0$ が存在したとする. このとき, $\dot{\gamma}(0) = \tau$ は

$$\tau = \cot \frac{l}{2} (\varphi^{(0)}(\mu, \mu') - \mu), \quad l = \ell(\mu, \mu') := 2 \arccos \left(\int_M \sqrt{\frac{d\mu_2}{d\mu_1}} d\mu_1 \right) \quad (2)$$

と表される. これは, **計量 G の測地線上の 2 点における各接線は $\mathcal{P}^+(M)$ 内で交わり, その交点が正規化幾何平均となることを示唆している** (逆に, 正規化幾何平均に対して, このような性質を満たす曲線は G の測地線に限ることもわかる).

*¹ 〒305-8571 茨城県つくば市天王台 1-1-1

e-mail: itohm@math.tsukuba.ac.jp

*² 〒345-8501 埼玉県南埼玉郡宮代町学園台 4-1

e-mail: hiroyasu@nit.ac.jp

また, (2) を (1) に代入することにより,

$$\gamma(t) = \frac{1}{\sin^2 \frac{l}{2}} \left(\sin \frac{l-t}{2} + \sin \frac{t}{2} \sqrt{\frac{d\mu'}{d\mu}} \right)^2 \mu \quad (3)$$

$$= a_1(t) \mu + a_2(t) \mu' + a_3(t) \varphi^{(0)}(\mu, \mu') \quad (4)$$

と表すことができる. ただし, $a_i : [0, l] \rightarrow \mathbb{R}$ ($i = 1, 2, 3$) は, $a_i(t) \geq 0$ かつ $\sum_{i=1}^3 a_i(t) = 1$ を満たす関数である. (4) の表記から, $\mathcal{P}^+(M)$ の任意の 2 点は測地線で結べることがわかる.

4. 小原氏は, 対称錐 Ω 上のあるポテンシャル関数に関するヘッセ計量 g を考え, さらに, (Ω, g) 上の双対接続構造 $(\nabla^{(\alpha)}, \nabla^{(-\alpha)})$, $-1 \leq \alpha \leq 1$ を定義し, $\nabla^{(\alpha)}$ に関する測地線分 (α -測地線分) の中点が端点の α -冪平均であることを示した. ここでの α -冪平均とは, 関数 $\sigma_{1/2}^{(\alpha)}(t) = \left(\frac{1+t^\alpha}{2} \right)^{1/\alpha}$ が生成する Ω の作用素平均である (詳細は [5] を参照) .

$(\mathcal{P}^+(M), G)$ の測地線 (0-測地線) についてみると, (3) 式から直ちに, **中点は μ と μ' の正規化 $\frac{1}{2}$ -冪平均に等しい**ことがわかる. [1, p.33] と同様の方法により, $(\mathcal{P}^+(M), G)$ 上にも双対接続構造 $(\nabla^{(\alpha)}, \nabla^{(-\alpha)})$ が定義でき, $\nabla^{(\alpha)}$ に関する測地線 $\gamma^{(\alpha)}(t) = f(t) d\theta$, $f(t) = f(\theta, t)$ は微分方程式

$$\frac{\partial}{\partial t} \left(\frac{\dot{f}(t)}{f(t)} \right) + \frac{1-\alpha}{2} \left(\frac{\dot{f}(t)}{f(t)} \right)^2 + \frac{1+\alpha}{2} \int_M \left(\frac{\dot{f}(t)}{f(t)} \right)^2 f(t) d\theta = 0$$

の解であることがわかっている ([3, 補遺 § 2] を参照) .

$\alpha = -1$ のときは, $\gamma^{(-1)}(t) = \mu + t\tau = \frac{1}{l}((l-t)\mu + t\mu')$ となり, μ と μ' の中点 $\gamma^{(-1)}(l/2)$ は $\varphi^{(1)}(\mu, \mu')$ である. $\alpha = 1$ のとき, μ と μ' を結ぶ 1-測地線分は, ある関数 $F(t)$ を用いて $\gamma^{(1)}(t) = \exp \left(\frac{t}{l} F(l) - F(t) \right) \cdot \left(\frac{d\mu'}{d\mu} \right)^{t/l} \mu$ と表され, $\gamma^{(1)}(l/2)$ は $\varphi^{(0)}(\mu, \mu')$ となることがわかる. 一般の α についても, μ と μ' を結ぶ α -測地線分の中点が $\varphi^{(\frac{1-\alpha}{2})}(\mu, \mu')$ に等しいことが予想される.

参考文献

- [1] S.-I. Amari and H. Nagaoka, *Methods of Information Geometry*, Trans. Math. Monogr. **191**, AMS, 2000.
- [2] T. Friedrich, Die Fisher-Information und symplektische Strukturen, Math. Nachr. **153** (1991), 273-296.
- [3] 伊藤 光弘, 重心写像の Fisher 情報幾何, 東京理科大学連続講演記録, 2015.
- [4] M. Itoh and H. Satoh, Geometry of Fisher information metric and the barycenter map, Entropy **17** (2015), 1814-1849.
- [5] A. Ohara, Geodesics for dual connections and means on symmetric cones, Integr. Equat. Oper. Th. **50** (2004), 537-548.